一　十三崖の地下壕造営の背景

１　第二次世界大戦末期

第二次世界大戦末期、松代（長野市）に地下大本営が建造（未完成）されました。

戦争の敗色が濃厚になると、日本軍部は徹底抗戦を叫び本土決戦を考えて、松代に地下大本営を建設することになりました。この地下大本営の砲弾庫として施工されたものが、中野市深沢地籍にある十三崖の地下壕です。

当時の内外の情勢は、

国外　サイパンが陥落、朝鮮海峡封鎖され、連合軍の九州、九十九里浜、鹿島灘など本土上陸が予想されていました。

国内　物資が著しく不足し、配給も少量となっていました。小銃も３８式から９９式になり、帯剣も不足し丸腰の兵隊も出ていました。兵隊の質も低下し虚弱者のための養護部隊も生まれました。松代大本営建設のうわさがちまたに流れていたようです。

《十三崖の全景》

２　大本営とは

まず、大本営とは、１８９３年（明治２６年）戦時における最高統帥機関が戦時大本営条例に基づき、制定したもので、天皇に直属し、陸軍の参謀総長が全軍の総参謀長として天皇を補佐するものでした。

１９０３（明治３６年）条例改正により参謀総長（陸軍）と軍令部長（海軍）は対等となり、さらに１９３７（昭和１２年）大本営令を制定し、戦時だけでなく事変であっても設けることができることとされました。実際の設置は日清戦争、日露戦争、及び日中・太平洋戦争の３回だけでした。

《十三崖地下壕　１７号入口》

《十三崖地下壕　入口（何号か不明）》

３　大本営を松代へ

大本営を東京から他へ移転しようと計画した軍は、陸軍省軍事課員井田正孝少佐が移転先の調査を開始しました。井田少佐は八王子、浅川（東京都）方面はもとより、長野県内でも諏訪、飯田、松本、上高地などを調査した後、最終的に松代（長野市・当時松代町）に決定したようです。

理由は

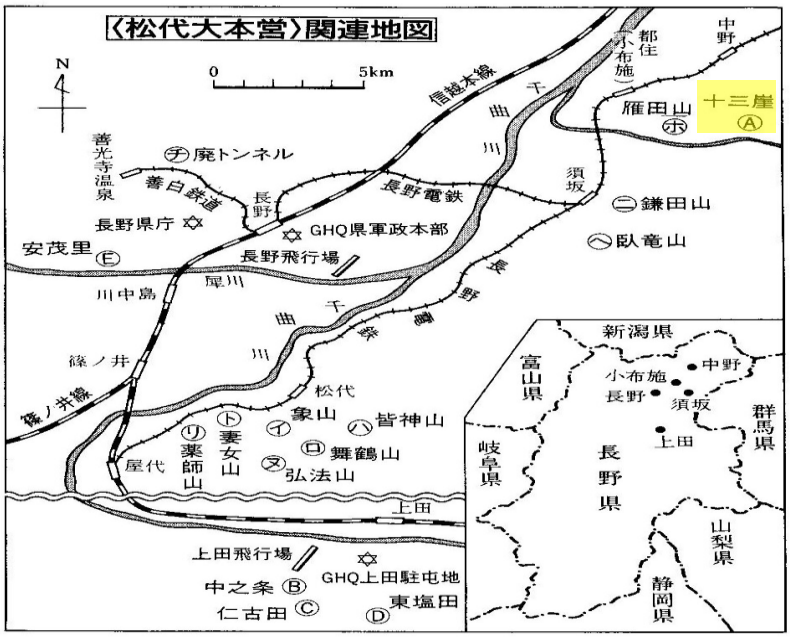
① 戦略的に、本州の最も幅の広い地帯にあって近くに飛行場があり、またさらに建設できる場所である。

② 固い岩盤であり、地質的に地下壕の掘削に適する。

③ 施工面から見ると長野県は比較的労働力があった。

④ 人情が純朴で、信州は「神州」に通じ一種の風格がある。

などの４点でした。



㋑ 政府機関松代分室・日本放送協会海外局・臨時中央電話局
㋺ 御文庫附属室(大本営地下壕)御座所・宮内省松代分室
㋩ 食糧庫
㋥ 送信施設・燃料庫・弾薬庫
㋭ 送信施設
㋮ 送信施設・弾薬庫
㋛ 受信施設
㋚ 皇太子・皇太后居住施設
㋟ 印刷局
㋬ 賢所仮殿

Ⓐ 弾薬庫
Ⓑ 陸軍飛行場防空壕
Ⓒ 飛行機工場
Ⓓ 部品工場
Ⓔ 海軍専用送受信施設

※㋑～㋬が「松代工事」(Ⓐ～Ⓑも同一予算)、中心は㋑～㋩、なおⒶ～Ⓔは関連工事

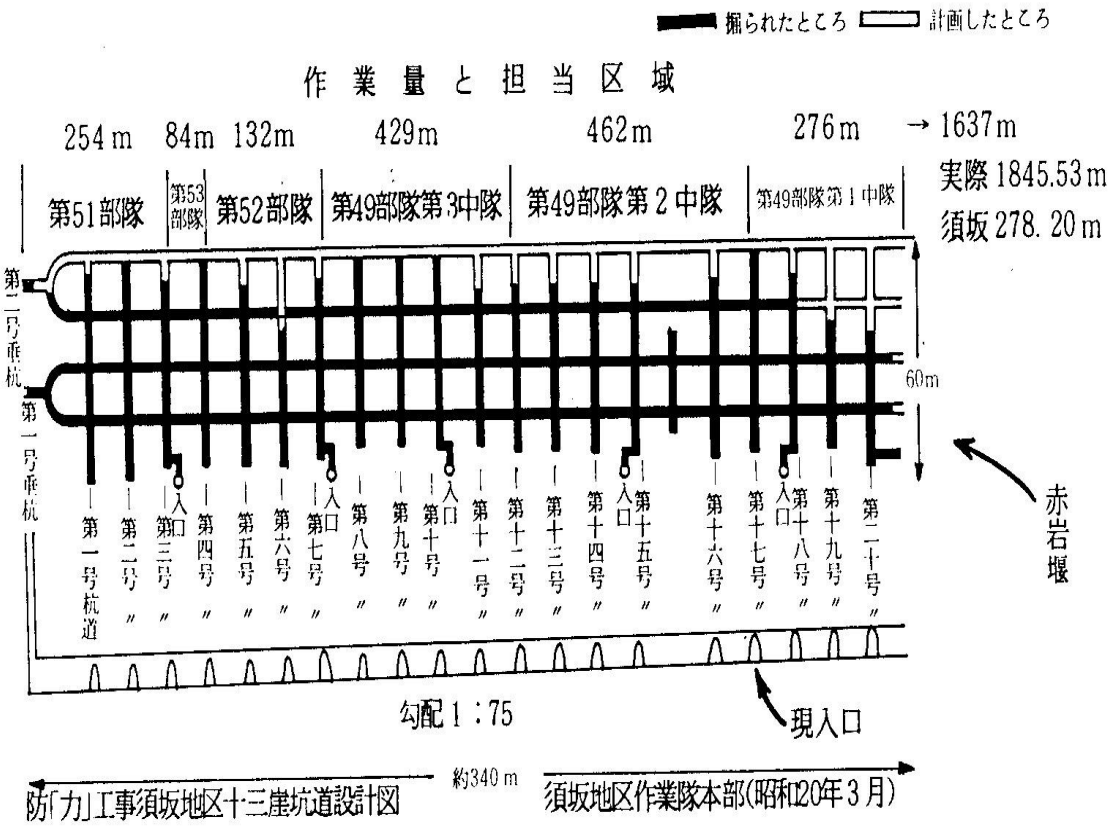
４　臥竜山（須坂市）から十三崖（中野市）へ

軍は砲弾庫を当初須坂市にある臥竜山に建設する予定でした。

この工事は、「防カ工事」と呼ばれました。「カ」とは金沢師団の「カ」の字をとってつけたものでした。

砲弾庫を建設するため、昭和２０年２月１６日から金沢の各部隊はまず、須坂市（当時須坂町）の臥竜山に入り２月２４日から４４の坑道を掘る計画で作業を開始しましたが、竜ケ池周辺はつるはしがきかずまた、山の裏側は岩が細かく砕けてくずれるためだめ。鎌田山だけはやや作業が可能であるといった状況でした。

全般的には、須坂地区での掘削は困難と判断をせざるを得なく、命令期間中に命令延長の２，０００メートルの掘削は絶望的となりました。



二　十三崖の地下壕の建設

１　砲弾庫、十三崖へ

昭和２０年２月２６日、陸軍中尉の小田切文治郎氏（中野市大字間長瀬出身）の提案により、中野市（当時科野村深沢）の十三崖に目が向けられ、北沢工兵中尉以下７名で試掘（試し掘り）を開始しました。

２月２７日の試掘の結果は、地質が凝灰岩でつるはしによる素掘りがきき、支柱の枠組み（崩れないように）も不要といった好条件であったので、平林中尉が金沢師団に赴き、十三崖への移転を打診（相談）しました。

３月６日、金沢師団長は十三崖を視察し、工事の移転を命令しました。３月１０日、須坂地区工事は全面的に中止され、全部隊は十三崖への移転を完了しました。

なお、この年はたいへんな大雪で電車は不通のときもあり、須坂からの移転はかなり困難だったそうです。

《十三崖地下壕内部》

２　工事の全体計画

十三崖の工事にあたっては、平岡小学校応接室に作業隊本部が置かれ、宿舎には科野小学校の体操場（体育館）、夜間瀬小学校（現山ノ内西小学校）の体操場（体育館）、金井の田尻富正氏宅（本部宿舎）、若宮の正翁寺などがあてられ、通信網も設置されました。

作業には、約１，０００人の将兵（兵隊）のほか、中野農商（現中野立志舘高校）の生徒や翼賛壮年団の団員ら地元から延１万人余の人が動員（集められ）され、昼夜３交替の突貫工事で施工されました。

ここでの工事では、外国人を強制的に連行し、労働させることはなかったようです。

《十三崖地下壕内部》

２　工事の状況

十三崖工事は以下のように掘られたようです。

①　最初は、５間（９メートル）のはしごをつないで崖の中腹、高さ１５メートル位のところから掘り始められました。

②　掘りは、古兵がつるはしの手掘りで行い、土砂搬出は新兵がモッコにより運び出しました。その土砂は川原の堤防と崖との凹部に埋められました。

③　東から１３本は第４９部隊、３本が第５２部隊、２本が第５３部隊、２本が第５１部隊という配置で掘削が行われました。

④　２０本の坑道は、第４９部隊が８００名、第５１部隊が１５０名、第５２部隊が１００名、第５３部隊が１００名の計１，１５０名で掘られました。

⑤　作業は、昼夜３交替の突貫工事で、命令された距離の掘削が終了した部隊には、休暇・帰郷も許されたので、各坑道とも競争で作業にあたったといわれています。

⑥　各部隊によって穴の高さは異なりますが、低いところで１．３メートル、高いところで２．８メートルありました。

⑦　下高井郡内から、大工さん７５３名、石工さん３３６名、鍛冶屋さん１００名、一般労務（一般労働者）４，９３２名、学徒（学生）４，５３６名、測量手５２名の合計１０，７０９名と運搬具・自動貨車５６台、牛馬車３３２台の応援がありました。

⑧　坑道の下を通っている赤岩せぎを壊さないよう、特に注意がされたようです。

⑨　掘削完了後は、爆風除けのため坑道入口は、５本に限定し、他は全てふさがれました。

⑩　働く人たちの食事は、麦飯でしたが十二分に配給され、時間になると、飯盒に詰められ係が坑道の中に持ってきてくれたそうです。魚は金沢から貨車一車輌分届けられました。時折、近くの村から食糧を調達してくる人もいたそうです。

３月２７日、正味２０日余で１５メートル間隔に２０本の坑道を持つ総延長１，８４５．５３メートルの地下弾薬貯蔵庫が完成しました。

３月３０日、一切の工事を完了し、本部・各部隊は金沢へ引き揚げました。その後、弾薬が貯蔵されましたが入りきらないものは、松林に野積みにされていたそうです。

敗戦後、貯蔵されていた弾薬は、アメリカ進駐軍が回収し、千葉県銚子沖へ投入したそうです。

この資料は、中野市中央公民館が防衛庁原剛氏、篠ノ井旭高校土屋光男氏、作業隊副官小田切文治郎氏、当時兵隊として作業にあたった須山和市氏（小布施町）、関甲子男氏（中野市）、小林清衛氏（中野市）、赤沼金次郎氏（須坂市）の証言を基にまとめた資料です。